

栃書連会報

第2号

栃木県宇都宮市花房3-2-25
TEL (0286) 34-0622〒320 栃木県宇都宮市花房3-2-25
栃書連盟 編集 印刷
振替口座 宇都宮5-15222
編集 印刷 ショウワ印刷(株)

本連盟行事への参加の意義

中井史朗

どんな芸術でも、自分自身の

うか。

うちにあるものを、なんらかの形で、外に表出しているものがあります。その意味では、芸術は孤独なものであり、書も例外ではありません。書は言語(文字)をかりて、これを線で空間に描くというしごとであります。特に書は一回限りの動きの中に定着させねばなりません。その一回限りという厳しさの中に筆を執ることに、耐えるということは、まさに孤独の世界に生きていることでもあります。

しかし孤独であるべき芸術であっても文学者には文学者の集りがあり、画家には画家の集りがあり、書に携わる者にも、その集りがあります。孤独の芸術にも、集団でなければ果せない効用があるからではないでしょう。

個展や社中展においては、その表現や、素材の選び方までが画一化され易く、見る者にとつては、どうしても、はじめから一つのもののさしを設定して、鑑賞することになり兼ねません。ところが、あらゆる書派の連合体である展覧会においては、自分の考えも及ばない世界の線や形や墨の色に出逢うことがあります。これは一つの殻に閉じ籠ろうとする書域に揺りを与えてくれます。好き嫌いに関係なく、すぐれたものは、その中で輝いてみえるから不思議です。このことは、おのれにとつて一つの警鐘となることでしょう。

栃木県書道連盟という集団が、結成以来三十五年間つづけて来た連盟書展は、多少の浮沈はあ

りましたが、他と我との比較検討ということで、高く評価されてよいのではないのでしょうか。またこの書展は、毎年すぐれた書家にお願して、批評して頂いています。これは眼の勉強のためにも、極めて有益な企画と自負しています。

もう一つの催としては、本連盟は毎年、練達の書人をお招きして、実技講習を開いています。実技などというものは、たつた一日の伝達講習で、そのわざの修得などできるわけのものではありません。しかし、すぐれた筆づかいを直接に見ることによって、執筆や速度や圧度の変化に驚き、書作への工夫がなされるならば、収穫はあったと思われまふ。なによりも、その書写態度にふれて、自分自身に鞭う

つことで、今後の書作や臨書方法に大きな力となることと思ひます。

実技講習など無駄だ、という人は、むしろ自分の書くことに、疑問をもたない人で、疑問なしでどうして進歩がありましようか。本連盟では、いろいろな先達からいろいろな古典について、実際に筆をとつて、指導をうけるという企画は、連盟書展と併せて、当分二本柱として、つづけて参りたいと思います。

このほかに、研修小旅行のようなものも予定されていますが、この方は、書を通しての親睦や、見識の交換など、その効用は高いものがあります。

どんなによい企画を致しましても、参加者が少く、内容性に乏しければ意味が薄くなります。本連盟の会員の皆様の行事への参加と、ご奮闘を心からお祈りする次第です。

受賞者

幸運な受賞

田中 暁亭
井泉水の句は、清例で歯切れが良くリズム感がある。

小さな土筆と大きな富士とを対比的に書きたかった。部分的に未消化な作品で満足できるものではなかったが、連盟賞を受賞できたことは、初出品の私にとって大きな励みとなりました。

連盟賞を受賞して

松本 宣響

この度の栃木県書道連盟展に出品の拙作に対して栄ある賞を載き、是れひとえに会長先生はじめ諸先生方の日頃の御指導の賜と感謝いたして居ります。今後とも精進致す所存ですので宜しく御指導の程お願いいたします。

七海会長、栃木県教育委員会より

芸術文化功労賞を受賞される

栃木県書道連盟会長七海水明先生には、風薫る五月十九日、県公館において栃木県教育委員会より、芸術文化功労者として、前宇大教授飯田氏ら四氏と共に表彰されました。本県書道界初の受賞で、心からお祝い申し上げる次第です。

実技講習会に参加して

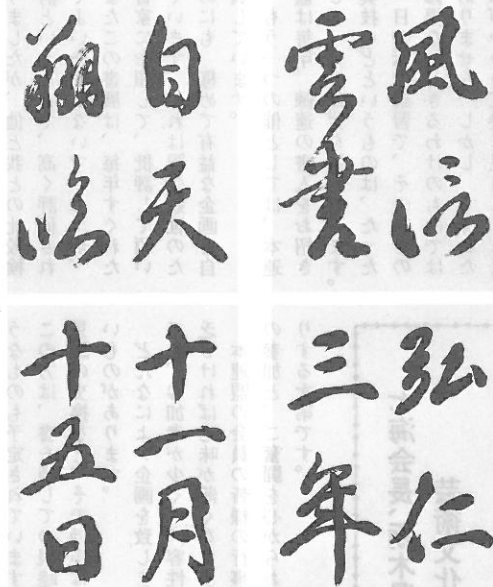
二月十一日、本会と栃木県書道教育研究会（会長中野永峰氏）の共催で宇都宮丸治ホテルで開催、講師は独立書人団常務理事・同研究部長の上松一条氏、本会からの参加者は五十二名、研究からは三十名、昨年に比して二十名ばかり少なかったことは誠に残念であった。でも出席された方にとっては、非常に大きな収穫があったことと思う。研究内容は、風信帖・灌頂記ということで、まあごくありふれたものであったかも知れないが、これらはいくら研究しても汲み尽せないものであると考えたのである。午前中一時間ばかり、空海の人柄、風信帖、灌頂記の持つ書的特色について、誠に深い研究、特に風信帖における執筆法、用筆法、運筆法等について、実にわかり易く話され、灌頂記についてはその率意感など氏独特の解明があったりして、ああ、そういうものかなと一同感を深くしたかと思う。いよいよ実技指導になったのであるが、私には非常に感銘深いものがあつた。それは何かというと氏の批評、添削の仕方が実

に親切であり、会員個々の個性というか、臨書の態度がどうであるかということ、極めて慎重に作品をとおして発見し見きわめようと、どこまでも作者の持つものを生かしていこうとする指導者としての立派な態度には、只々敬服するだけであつた。作品をじつと見つめながら自分の指を動かし作者の運筆の経路をたどられる。朱は入れない。〇はつけない。一見不親切のように見る人もあろうが、私はここにも氏の指導者としての高い識見と指導の骨とを無言の裡に教えられたものと思ひ、ほんとうによい講師をむかえることができたことを満足に思つた。さつさと〇をつけていくことは極めて容易であり、もらった方もうれいかも知れないが、そのあたりお互いに大きな反省をしなければならぬのではなからうか。〇をいただいたのはわずかに二人だけというのだから過去にそんな講習会はなかった筈である。それでもみんな一生懸命書いていました。いつの間にか三時閉会となつてしまった。欠席された方は本当に惜しいこ

とをしたものだと思う。どうか次回の講習会にはもつともっと多くの方が参加して下さいようお願いしたい気持ちである。

写真は講師先生が会場で書かれた半紙作品二十三枚の中の一部。

(七海水明記)



第35回

栃木県書道連盟会員展批評

批評者 貞政 少登氏

赤沢 竹軒氏 行から草へ急にやりすぎ、見せ場多すぎピンぼけになりやすい。力量あり、落款よし。
新井 幽秋氏 きれいに彫っている。味わい、雅が一歩ほしい。

宇宙間の広がりほしい。腕よし。
新井 幽石氏 よく鍛練されて線がねれている。見せ場多すぎ。「窮」長い画太すぎ、軽みほしい。
荒牧 桂舟氏 よくまとまって

いる。名前の位置よい。文字を小さくすると白が生きてくる。墨のちりをふまえてほしい。
井沢 桂舟氏 老体のようなムードを受ける。筆力をだす勉強をされたらよい。全体的に流れのよい作品。印泥が軽い。
池沢 畔蒲氏 鍛練された作品。貫通している。面白い篆書。太細の線を極端にださないように。筆力を通してほしい。名大い。生沢 道子氏 漂う雰囲気を出そうとしているが、墨の立体運動、表現に心がけてほしい。最後の点よし。墨色よし。
石下 光枝氏 よく貫通している。料紙にうす墨で書くときやすいが、さらさらとすべて流れてしまう。紙、表装工夫を。岩沢 松清氏 出だしはあまり力まないで、だんだん盛りあげてゆくように。密のところいいが、粗、一ヶ所をどこにするか。臼井 仙道氏 力強くたくましい。名の入れ方、工夫しているが？ 定石はあるが自然に入れたらよい。「風」のすわりよし。大谷津紫水氏 ことばもいいし、ことば、自分、表現の三者との戦いあり。心象をどう写しだすか。焦点を明確に。
大森 翠洲氏 まとまりよろしい。鑑賞者の立場から魅力がほしい。味つけを工夫してほしい。



材料よし。
小川 仲秋氏 長画部三ヶ所あり。二ヶ所程度にしたらどうか。鍛練された洪い線でよろしい。
柿沼 翠流氏 さすがの腕だ。白をよくささえている。文字の形よりも、横の振幅を。白へのひびきほしい。印で生死きまる。
粕谷 東峰氏 出だしはよいが最後の二画で勝負が決まる。
川合 峨山氏 調子高い。印よし。「る」明るい、よくおさまっている。
木曾 梅邦氏 白との融合よし。最後の「地」、意気ごみすぎ固い。最後の一字で決まる。
菊池 茅屋氏 「味」の調子で書いたら良かった。貫通性やや乏しい。出だしよし。線、パンチいていて明るさあり、よし。

榮生川 天遊氏 発想と作者の心のわかる作品。素材、表現技術の課題、ふまえをもつて望んだ作品。心と言葉の関係追求を小滝 きみ氏 白をよく生かしている。短い線、たつぷりとしていてよし。
佐藤 堪氏 「愚トホ」に見える。墨量に工夫を。愚の心の部分をもつと淡々と、そして次へとつづけてゆくとよい。
斎藤 笙風氏 面白い。宗代の妖気を感じる。白を見つめたいい出来、明るい。静けさあり。名前もよい。
斎藤 美与子氏 よく出来ている。貫通している。しんにょうさらつとして気持ちいい。
酒井 真沙氏 作者のねらい、ややもするとマンガ的におち入りやすいが、一歩手前でよくとどめている。下部の余白よし。
沢田 寛氏 大体よし。第一画パンチきいている。曲線多すぎ。印、右常識を破る。発想に対しての押印としては一寸軽い。
沢田 幽石氏 線のきれ、ねばりよし。流れあり。
篠原 珠簾氏 貫通しているが、部分的に気持がよんでいる。とめる部分、ぬく部分工夫を。
白井 薫苑氏 明治の気風を感じる。出だし大きすぎる。全部大きすぎると駄目。大小の変化を。名前、書と入れた方がよい。
諏訪 公道氏 貫通している。最近の作ではいい方だ。名前を少し離れた方がよい。
菅原 芳雅氏 意欲的、面白い。「尺山」に見えやすいから要注意。「山」よし。
菅又 苜舟氏 貫通している。一字目、少し小さく。だんだん不足になった。初め軽く、だんだん広がった方が自然だ。
杉山 弘育氏 さんずいの曲線、うるさい。もつと簡潔に。最初は洒落つ気出さないように。初めと終り、扁と旁に空間を。
杉山 晴勇氏 出だしの大きさと下の大きき、中央部で板ばさみになってしまった、苦しい。焦点がぼける。名前は小さく。
早乙女 嶮童氏 隷書、左右窮屈、上下の開きほしい。名前が大きすぎる。
早乙女 楓氏 よくのび、流れと墨色の関係よし。同じ運動の部分、工夫を要する。
田嶋 青龍氏 一ヶ所、息をぬいてほしい。明るさがでてくる。
田嶋 芽甲氏 ねれている。味わいあり。白多い、出だし「楽」がよすぎる。いいものを期待させ、うち出してゆかなければ。
田中 暁亭氏 よくまとまり、貫通している。無理のない、味わいあり。直線の中にやわらぎがでれば広がりが出てくる。
高梨 峰鶴氏 貫通している。墨の濃さと筆のぼりつとしたものをだしてほしい。しめりがち。
高橋 日傳氏 文字が小さくても、作品の重さ、貫禄を感じた。
津久井 汀舟氏 ねらいあり、よし。造形的にも上部一線、非凡、アクション、凄い。気持の上で一寸変化がほしい。印よし。
塚本 瑞峰氏 気持の上での連綿、ほしい。
中野 永峰氏 下部が一寸重い。上の二字が上部にあつて丁度よい。墨も筆もよくのびている。見たときにすつと貫通して見えるかどうか？がたつきを感じる。内面、質で戦った方がよい。

長嶋 杜典氏 最初の扁の「谷」たくましさにくらべ、旁の「欠」が弱い。形の上では白があるが窮屈だ。余白ほしい。
七海 水明氏 素朴な楷書表現、風圧あり。行書で流した方が書きやすいのに、楷書で見られる作品にするのは、むずかしい。
生田目 史雲氏 終りの部分に気をつけないと息苦しくなる。余韻を持つて終らせるか、どうするか工夫を。印大きすぎる。
成田 穂州氏 瀟洒、すがすがしい作品である。白を多くとっている。古い表現に魅力を感じるようになってきた。涼風感ず。
平間 香浦氏 出だし、文字大きすぎる。乙(天)が乙(去)に見えてしまう。無理なく素直で趣味なし。何か一寸ほしい。
本多 雨情氏 朱、ぎらぎら光る。文字はしつかりしていてよい。白の線、強すぎる。色のとけあいほしい。
増淵 硯水氏 貫通力あり、よし。連綿の行草で印の大ききと位置、一工夫を。印と印の間を少し離れたらどうか。
増淵 春雪氏 力のこもったところよし。行書で楷書が行書の出だし、動きをとめさせるのは。旁からしんじようへ要注意。
松本 晃峰氏 墨を濃くするか、薄くするか、中途半端な感じ。

茶泥はやたらに使用しない方がよい。

松本 宜馨氏 線のやわらぎ、ねれ、貫通、落隸もよし。印のにじみが気になる。

山口 麗峰氏 意欲的、よし。大胆、感心した。下部、足をひきずったようだ。一行から二行へ、立って運ぶように。

山崎 素柊氏 嫌味なし。てらいなし。物足りなさあり。

和氣 良克氏 意欲的、ねらいを持った作品。線ののび、気持と運動が一致している。横画の長さ太さを平凡にしたら。

渡辺 遊竹氏 長い鍛練と見識を感じる。隸書の骨格、たくましさがあったらいいなあと感じる。名の入れ方よい。

渡辺 登水氏 てらいなし。淡々としている。素朴の中にあまり酒落つ気を出さないように。

山下 スミ氏 戦艦ヤマトのようだ。胸の中のものやしたものをを感じる。棟方志功の表現だ。軽いとぶの反対の志向か？

西安書法家朋友への手紙

もうすぐ、今年も夏がやって来ます。良いものです。昨年の夏は御地での愉しい、そして充

生沼 冬情氏 いい隸書。線ののび、墨色よし。印くどい。二つ押すなら、もつと小さく、一工夫を。

岡本 清秀氏 線、強い。緊張感あり。いい作品だ。白と朱の關係、充実している。

佐々木 照夫氏 隸書作品。左右の余白、窮屈。印の場所と色あいに工夫を。

川上 尚雲氏 切れ味よし。針切のような感じ。緊張感あり。

印の位置、一寸離れすぎ。

山中 洵外氏 内にこもった力あり。質が厚い。白をとるときには他の字にも、一字の中に白を作るとよい。

斎藤 希堂氏 大胆さよし。最後はしっかりしないので、かすれた方がよい。林武の絵のように、一ヶ所調子を破る法を。

桜井 敬朔氏 線、よし。ねれている。無理もなし。印がおし。緊張感を印で甘くした。

(分責者 大谷津昭男)

すか。お変わりありませんか。益々ご研究をつまれておられることでしょうか。

黄謙石さんは相変わらずですか。篆書に篆刻に没頭されているのでしょうか。あの時は本当にビックリしました。いきなり、篆書で「葡萄酒」と、かなりの速筆でグイグイ押しました。あの有名な涼洲詩です。呼吸をのんで見守るうちに忽ち全紙にまとめあげました。まことに見事なものでした。落款に終南山人とありました。その篆書が全く何の苦もなく筆先から次々とほとばしるのには驚きました。私もメモかなんかを認めるような感じで気負いもなく、いとも坦々とやってのけました。

愧得詩書雙
絶養惟念先
生情韻異同
異域同日
月神州扶桑
永相親
辛酉八月中秋日
書謝
白石湯先生
鍾明善於西安

この時、これなら篆刻もやられるなど直感したことでした。思ったとおり終南印社を興されているとの事でした。そこで早速、刻を頼むことにしました。小判型の朱文(東僊窟主)もその一願で今、手許において宝用しています。それに忘れられないのは(西安再来)の印稿に対し、あなたは、(長安归来)と白文の方印にしてくれました。大変な感激でした。ヒシヒシと真情が伝って来ました。この印は特に心して用いることにしています。(今年は目下のところ出かけられそうにありません。残念です)更に、御地を離れる日は早朝であつたのに出発間際パスに人を介して「禅心」と書した小品を届けて頂きました。これ又、慮外のことで感銘を新にしました。表装したこの作品は時折披見して終南山人や皆さんのことを思い出しています。そして早い折に再会できることを希っております。

鍾明善先生はいかがお過ごしでしょうか。その節はまた大変お世話になりました。昨年、帰国して程なく、大阪の友人を通して、私のためにつくられた先生の詩をお寄せ頂きました。全く身に余る喜び、何とも申しあげようもない、感謝の気持と新な衝撃に似たものを受けました。この日のことは現在も全く同じです。あの席書の折先生は中国側团长として第一番目に筆をとられて自作の詩を書かれました。私にも理解できるものでした。それを見事な筆蹟で丁寧に書かれました。その時、私が「詩書双絶ですな」と申しあげたら、会場に大きな拍手の渦が起りました。日中相親しむの声だったのでしょうか。これも忘れ得ぬ一コマでした。それで先生は後日ご鄭重にも詩を示されたのでした。こんどは、私が愧しい思いをすることになりましようが、敢てご披露しましよう。

こう記している間にもあの時の皆さんの姿が次々に浮んで来ます。しかしもう紙面がありません。それにお世話になったことや懐しさが先に立って筆も進まなくなりましたので再びお会いする日の早いことを念じつつ。

再見・再見
(東僊窟主)



第八回県美術展より

会期 五十六年十二月四日
二十五日

会場 県立美術館

書道部門の出品数二二四点、

入選一〇八名(四八%) 審査員

五名、招待者十五名の計一二八

名が展示された。本県では昭和

二十二年度から四十八年度まで

の県教育委員会の単独主催で県

展が開催されていたが、昭和四

十九年度から、県文化協会が加

わり、第一回展としている。通

算すると三十五回展になる。ち

なみに四十九年の第一回展では、

蒨田真齋、川俣古舟、津久井汀

舟、七海水明の四氏の審査員、

第八回まで計二十一名が審査を

経験している。

物語者

県 芸 審 査 員 一 覧		49	50	51	52	53	54	55	56	計
氏 名	年	1	2	3	4	5	6	7	8	
1 蒨田 真齋		○								2
2 関沢 鶴沙			○							1
3 川俣 古舟		○			○			○		3
4 石川 本魚			○			○				3
5 高橋 日傳			○				○			2
6 七海 水明		○			○			○		3
7 中井 史朗			○			○			○	3
8 白石 宙和				○			○			2
9 川俣 三千木				○			○			2
10 中野 永峰			○		○					2
11 津久井汀舟		○			○					2
12 酒井 真沙					○			○		2
13 池沢 畔蒲								○		1
14 笹沼 壺石							○			1
15 重原 聖鳥										1
16 中津原 軒陽						○				1
17 田島 芽甲								○		1
県 外	印南 溪竜	○								1
	宇留野 清華		○				○			2
	小林 翠寛			○		○				2
	草野 霧田				○					1
	新井 光風							○		1
	白井 竹舟								○	1

審査員 白井竹舟(東京) 石川本魚、中井史朗、酒井真沙、池沢畔蒲の五氏。

芸術祭賞 湯沢誠(鹿沼) 準芸術祭賞 小松畔雲(宇都宮) 猪爪清(足利) 奨励賞 菅原芳子(西那須野) 小幡敬堂(日光) 百目鬼賢(宇都宮) 本田雨情(国分寺) 桜井敬朔(河内町)の各氏。

白井竹舟の感想
一、二二四点は昨年より増加はしているが、私の予想より少ない。書道人口の乏しさが、県展壁の厚さによるものか……。

二、作品別に見て、漢字創作一四一点に対し仮名創作の二四点、近代詩二一点は少なすぎるか、

書字の順序が今日でも漢字から仮名へと移行するためか、仮名の先達が少ないからでしょうか。三、質的な面では、かなり練度がよく粒ぞろい、入落や入賞の差も紙一重と思われる。

四、漢字多字数、近代詩等になりに類型作品が印象的、師風の影響であろうか、ある程度はやむをえないが、もつと筆者の独自性がほしい。入賞者の概詳、芸術祭賞、湯沢氏の烈は素材と表現との完全な融け合いを見せた快作でした。

準芸術祭賞小松氏の秋江図は振幅が大きく変転自在で技術的に高度に鍛錬されたものです。こんごは技術に溺れない用心が

競書誌「書典」

昭和二十八年、故宮下竹洞が主宰して書画会を創立、同時に競書誌「書典」を発行したことはじまり、現在通刊三五四号となる。

「書典」の題字は、風韻たかき書風で二世を風靡した松本芳翠が、直門宮下竹洞の壮筆を祝して揮毫されたもの。
昭和五十三年宮下竹洞が他界した現在、西田端章先生はじめ多くの諸先生の協賛を得て、久津美碧洋、渡辺竹亭、本多雨情

と思います。
同、猪爪氏の宮中行楽詩は前者と共に多字数作ながら犀利な線が、音をたててきびしく紙中に切り込む思いがあります。息づまる感があります。ゆたかさとゆとりが加わればと思います。

奨励賞では菅原さんの牧水の歌が起承転結の妙を得て楽しい作です。百目鬼氏短歌十三首はいいいな作ですが端麗に過ぎて変化が乏しく、桜井氏の柿の実はスケールの大きなあたたかいふん囲気、ねばりある線が魅力でした。小幡氏の篆刻、本多氏の隷書ともに手練の作と拝見しました。

らが中心となって執筆しているが、規定文字等には優美で気韻高き宮下竹洞の遺筆を用いている。
なお発刊以来、藤原松風先生指導による南画部門を設けているのも特色の一つか。

本部 宇都宮市鶴田町 三〇一の三 三二〇 宮下五百里

「書法」誌について

近部 蓬舟
本誌は古典・名跡を対象とし、その多様の統一や美の形式の一般的法則性・原理性を抽出し、

分析研究することにより、体験の創造的表出作用に芸術的形成を与えたいと思います。

志を同じくする各流派の書家の方々に、委員又は支部長に御就任いただき、御支援いただいております。

編集

○ 本誌は文部省の正しい書体を学生部に提載し、一般部は古典法帖を手本の左側に提載し、古典臨書を奨励しております。

審査は厳正公平で、各流派の特異性を尊重し、写真提載も同一支部に偏しないように致しております。

毎年秋に全国公募展が開催され、県知事賞や県教育長賞等も授与されています。

栃書連訪中企画のお知らせ
栃書連海外研修として、五十八年夏訪中を企画立案中です。

- 北京 (万里の長城・明の十三陵・市内観光・故宮博物院等) 濟南・山東省
 - 泰山 (碑林・中国三大宮殿等) 泰安・曲阜 (孔子廟等・中国書家との交歓会) 上海 成田
- 会員諸氏の声を聞き、なかみの濃い研修会したいと思いますので、ご意見をお寄せ下さい。

社中だより

星山社

津久井俊郎

星山社は、今から十三年前、「書道の本質を探究するとともに、会員相互の親睦を図る」ことを目的として生まれた。事務局を、宇都宮の星が丘の我が家に置くことからつけた名である。発足当時は、会員はわずか八名であった。それが、今は三十数名を擁する会となった。今昔の感を強くしている。

星山社は、古典の臨書を重んじると共に、会員各自の好みや個性を尊重している。篆刻に優れた者、木簡や隷書を好む者、楷書を研究する者、行草体をよくする者、近代詩文に挑む者、仮名を勉強する者等々、いろいろな人がいて、バラエティーに富んだ会である。

本会では月例の臨書研究会や創作研究会による書技の錬磨の成果を、毎年八月に星山社展として発表している。又秋には、合宿錬成会や書の勉強を兼ねた親睦旅行、中央書展の見学などが行われる。

猶興社

川上 尚雲

わけでも、多胡郡碑の見学旅行、那須国造碑の見学、黒羽城址における鳴鶴の碑の拓本実技研究会等は、忘れられない楽しい思い出として残っている。

星山社は、厳しさの中にもあたたかさあふれる。書が好きでたまらない者の集まりである。

猶興社は書を新しいものとして取り上げ、情熱を注いで書作しようとする人達の結合であって、古典の探究につとめ、線の鍛練、線美、造形美、流動美の原理追求を念願として書作に精進することを目標とし結成されたグループです。猶興社の名称は、戦前川上が大川周明安岡正篤と血盟思想活動を行って居た当時の名称を転用したのです。

現在社の活動は、研修、研修旅行、展覧会の三つで、研修会は中央（玄潮会）より講師を招いての合宿、会員同志の相互錬成会、その他中央諸団体の合宿研究会への参加による研修、次に各自の視野見識を高めるため相互の親睦を計るための研修旅行、本年は益子方面に旅行し、円通寺には小川瓦木先生の個展作品全部が収蔵されて居ったための鑑賞出来たのは幸でした。次に社中展ですが、五十二年度から大田原市商工会議所に開催、本年も十月二、三日に第六回展が開催される予定です。今までに、川俣古舟、中井史朗、白石宙和の諸先生には御来場をいただき御高評御教導を賜り会員一同有り難さを身に感じ大いに勉強させられています。今後諸先生には何かと御指導を賜ります様御願い申し上げます。

●書友●

創設は、昭和二十二年七月、池澤畔瀧主宰、「正しく明るい心を書に現わそう」を信條として、終戦後の人々のすさんだ心を書道を通して何とかしようと池澤先生の指導で栃木商業高校書道部有志により編集発行された。

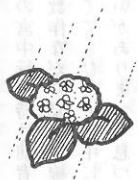
現在の、書友誌は、誕生以来池澤先生を中心に先生門下の小島畔堂、丸山曉鶴、磯部畔瀧、富田幽圃、田中曉亭、西村鵠洞、大森翠洲、渡辺蘭洲、田中松雲等をはじめ、三十名の内員が執筆に参加、編集は、矢島蓮蒲、山崎素枝、川島汀蒲、杉山幸枝が当たり、A5版50ページで一般部（高校、大学生を含む）条幅、規定、研究【臨書】、仮名、随書、ペン字部等に中学、小学、幼児部等あわせて七千余の会員を有し、会費月額百五十円、毎月一回一日に発行され、本年六月号で四一五号になる。毎月の競書の各部優秀作品百三十点先生方の手本とか条幅作品等書友会本部画廊に展示し会員の参考になっている。

会の行事としては、墨秀展（五月）、指導者を対象とした講習会（五月）合宿研修会（八月）内員どうしの研修会、研修旅行、展覧会見学、等を行っている。小中学生を対象として講習会や展覧会も企画している。

書友会は、書を勉強していく会です。ご入会の際は、栃木市旭町一三一七杉山方書友会本部宛、住所、氏名、電話番号名記の上、会費（六カ月九百円）を添えて申込み下さい。郵送を要する場合は、郵便料金を（一部五十五円一部増ごとに十円増）加算して下さい。

・振替は（宇都宮）二一一三六八六です。

（事務局 杉山晴勇記）



編集後記

このたび編集係の發生川成美さんが、文部省による在外教育施設派遣教員として、本年四月より三ヶ年、モスクワに長期研修出張することになりました。連絡先は次のとおりです。

JAPANESE SCHOOL
EMBASSY OF JAPAN
SOBINSKY PERULOK
MOSCOW, U.S.S.R. 5-A
(TEL31-8733)

ソビエト連邦 モスクワ市
ソビノフスキー
ペレロフ 5-A
日本大使館日本語学校

なお發生川さんに変わり、編集係を増淵三郎さんが担当することになりましたので、お知らせいたします。

会費納入のお願い
会費未納の方は、現金書留か為替で左記へご送金下さい。尚五十六年より会費三千円になりました。

宇都宮市一の沢五〇三
作新学院内
重原 聖鳥